

「アンナの賛美」

2015年04月23日

ルカによる福音書 2章36節～40節。また、アシェル族のファヌエルの娘で、アンナという女預言者がいた。非常に年をとって、若いとき嫁いであら七年間夫と共に暮らしたが、夫に死に別れ、八十四歳になっていた。彼女は神殿を離れず、断食したり祈ったりして、夜も昼も神に仕えていたが、そのとき、近づいて来て神を賛美し、エルサレムの救いを待ち望んでいる人々皆に幼子のことを話した。

親子は主の律法で定められたことをみな終えたので、自分たちの町であるガリラヤのナザレに帰った。幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた。

シメオンは神殿で幼子イエスに出会い「主よ、今こそあなたはお言葉通り／この僕を安らかに去らせてくださいます」と幼児イエスにメシア（救い主）を見て喜び、救いを備えてくださった神を賛美する。そして、母マリアに、幼子イエスに託された使命とマリアの苦難について預言する。

続いて、上記のアンナの賛美が語られる。アンナはアシェル族のファヌエルの娘で、女預言者であった。若い時に結婚し、7年間、夫と共に暮らしたが、死別し、84歳の高齢になっていた。彼女は神殿に住み着き、断食をし、祈り、ひたすら神に仕える日々を送っていた。このアンナが近づいて来て、幼児イエスを見て、神を賛美する。彼女も幼児イエスにメシアを見たのである。救いを待ち望んでいる人々に対し、神の救いは幼子イエスに現されたと言った。ルカは神殿において、シメオンとアンナから、幼子イエスにメシアを見て、喜び賛美する二人の信仰者の預言を記している。美しい絵になるシーンである。歴史的事実とはほど遠いが、主イエスのご降誕に神の救いが現されたことを、二人の預言によって明示しようとしている。

降誕物語はアンナの賛美で終わる。ルカは主イエスの生涯、そして十字架と復活の福音を著したいと筆を進めようとしている。宮もうでの時も、福音の光から、主イエスのご降誕の意味を神話的に描き出した。それは、天使と対話し、宇宙的な広がりを持ちながら、貧しく捨て置かれた者たちや、老いてなお幻を見る者たちが神の栄光に包まれる福音の事実を再現した記述である。主イエスが表された福音を読み進むと、降誕物語を書いた意図を受け止めることができる。

現在の私たちは、理性的に納得できることを真実なものとして受け入れるが、聖書は、神話的、寓話的な記述によって、メッセージを伝える手法を取っている。柔らかな感性、大きく広がる想像力を持っていたからである。あり得ない話と見ないで、著者たちの意図するメッセージを読み取っていく時、真に支えられる確かな真理に出会う。

ヨセフとマリアは律法で定められたことをなし終えた。神を恐れ、律法を遵守する夫婦であったと伝えている。二人は生活の場であったガリラヤのナザレに帰って行った。幼子イエスは、このナザレで育つ。背丈も伸び、たくましく成長し、知恵が増していった。そして、神の恵みに包まれていた。父ヨセフの大工仕事を手伝い、ヨセフ亡き後、家族を支える労働の中で、激しい伝道生活をやり抜く体力を付けたのであろう。知恵は、ナザレのシナゴグ（会堂）で聖書を読み、教えられたのであろう。そして、頑強な宗教科体制を打ち破って行く自由闊達な言葉と行動は神の恵みに与ったからではないか。ナザレでの成長と生活に関心を持つが、ほとんど伝えられていないことが残念である。